特別部門 (学校心理学)

学校心理学の研究とその動向
—学校心理士としての「研究」と「実践」—

松 浦 宏

(奈良産業大学)

1. はじめに～学校心理学の付記と学校心理士～

本稿は、2000年9月から2001年9月までの学校心理学に関する研究の動向を概観し、今後の方向づけや課題を検討することが主たる役割であるが、その中心課題に移る前に、教育心理学会における「学校心理学」の検討の展開と「学校心理士」の誕生の経緯を簡単にたどってみる。

日本教育心理学会(以下、学会)が学校心理学という用語を使って、明確な検討を始めたのは、1991年(平成3年)、第33回総会(於上越教育大学)の研究委員会企画シンポジウム「学校心理学をめぐって」である。

このシンポジウムの司会者、高野清純氏は趣旨説明の中で、「このこと(学校心理学専門家養成)の基本的な目的は、欧米のスクールサイコロジストに相当する専門家を養成することであるが、当面は、教員養成系の大学院の現状にかんがみて、……」と述べ、教員養成系の大学院における教育心理学専攻(あるいは、心理学専攻)の教育と訓練を土台にした学校心理学専門家養成に向けたシンポジウムが進められた。

学校心理学専門家養成の問題は、学校心理学実行委員会で検討が進められており、「学校心理学」という専門性を確立する大学院での履修科目を、①教育心理学に関する科目、②発達心理学に関する科目、③臨床心理学に関する科目、④生徒指導・進路指導に関する科目(実習を含む)、⑤教育評価・心理検査(実習を含む)⑥学校カウンセリング(実習を含む)の6つの領域で、各2単位以上、合計12単位以上という学習内容と基準がまとめられ、大学院での専門家養成を各大学院に勧めるとともに、文部省(当時)や免許授与者である都道府県教育委員会に「学校心理学」を付記することの意義と実現を求める活動を展開していた。(2000年度入学者からは、7領域14単位以上)

この後、学校心理学実行委員会は教員養成系の大学院を中心とし、全国の教育心理学(関連の)専攻を持つ大学院とその担当者に学校心理学のカリキュラムの構成と指導内容の充実、特に実習を必要とする科目の実習の行い方などについての研究を勧めるとともに、都道府県教育委員会へ「学校心理学の付記」の実現を、リーフレット

を作成するなどして、積極的に申し入れてきた。(日本教育心理学会、1993)その結果、大阪府(大阪教育大学大学院)において最初に「付記」が認められ、現在は17道府県で実施されている。

しかし、これは最善のことではなく、心理学専門家として学校教育の場で活動するには、いくつかの解決すべき課題を持っている。すなわち、2年間の大学院修士課程において、6領域12単位の学習で専門家養成が可能か(アメリカ合衆国では、スクールカウンセラーやスクールサイコロジストの養成は、少なくとも2年間で30単位以上と、さらに1年間のインターンの単位を取得することが一般的である)、「付記」だけで学校現場に受け入れられるか(正規の教員免許ではないため)、学校組織の中に心理学専門職としての位置があるか(心理学専門家を配置する行政的配慮と教育的ニーズが低い)など専門家養成の側と受け入れ側の両方に検討すべき課題があり現在もそれらは続いている。

1995年から1996年にかけて、教育心理学の実践性の強調と臨床心理士の学校教育への関わりなどを契機に、学校心理学実行委員会は、まず、学会の事業として「学校心理士の資格認定」を具体的に検討することを開始した。そこでは、この資格の概念的基準として、「専修免許状に学校心理学を付記する際の条件と同等であること」と「学校教育との関連を重視すること」が強調され、これを説明するために、「スクールサイコロジストとは(学校心理学に基づくスクールカウンセラー)」という8ページのリーフレットが作成され、発行された。(日本教育心理学会、1996)

これを踏み台にして、1996年9月の第38回学会総会に於いて、「学校心理士の資格認定」を開始するための、基調講演とシンポジウムが開催された。一般公開の基調講演は、石隈利紀氏の「学校心理学とスクールカウンセラー一人ひとりの児童生徒を生かす学校教育をめざして」で、これを踏まえて、「学校心理学とスクールカウンセリング」のシンポジウムが行われ、活発な意見交換がなされた。

1997年度から、学会は、学校心理学実行委員会による「付記」をより一層広げるよう各大学院と連携を保ちながら、学校心理士資格認定委員会を設置して、学校心理士

の資格認定と学校心理士の活動と研修(日本学校心理士会)や学校心理学の研究を推進することとなり、現在に至っている。

また、2002年度からは、学校心理士の資格認定は、日本教育心理学会、日本特殊教育学会、日本発達障害学会、日本発達心理学会、日本LD学会の5つの学会による学会連合格「学校心理士」認定運営機構によって進められることになっている。

2. シンポジウム等に見られる学校心理学の課題

さて、このような経緯のもとで始まった「学校心理学」と「学校心理士」が着実に広がりつつあるが、一方では、学校心理学は何を研究し、学校心理士は何をするのかの問題が強く指摘されている。

学会や学会員あるいは、学会総会を担当する大学が学校心理学への関心をどのように高めて来ているかを見るために、学会総会におけるシンポジウムのテーマを概観してみる。特に、自主シンポジウムは学会員が持っている問題意識を強く反映していると考えられるので、1995年(学校心理学元年の前)から7年間の学校心理学のテーマを通覧する。

注(準備委員会):準備委員会企画シンポジウム
(研究委員会):研究委員会企画シンポジウム
(認定委員会):学校心理士資格認定委員会企画シンポジウム
(自主):自主シンポジウム

1995年:第37回総会,茨城大学

「学校不適応に対する具体的対応方略」(準備委員会)
「児童・生徒の発達に対する心理教育的援助サービスニーズに関する学校心理学的研究(1),(2),(3)」(グループ発表)

1996年:第38回総会,筑波大学

基調講演(公開)
「学校心理学とスクールカウンセリング～一人ひとりの児童生徒を生かす学校教育をめざして～」
シンポジウム(公開)
「学校心理学とスクールカウンセリング」
(以上日本教育心理学会として)

「いじめ」(研究委員会)
「教科学習に困難を示す子どもたちへの教育支援」(準備委員会)
「不登校やいじめの問題を学校ストレスという観点から考える」(準備委員会)
「障害児教育における学校心理学の適用—教育計画と支援システム—」(準備委員会)
「ことばの発達支援に語用論研究の果たした役割」(準備委員会)

「学習心理学・発達心理学・臨床心理学の学校心理学への貢献」(準備委員会)

「障害児の心理・教育アセスメントと個別指導計画の作成～K-A-B-Cを中心に～」(自主)

「中学生・高校生がスクールカウンセラーに求める援助をめぐって—学校心理学に基づく調査結果と生徒自身の議論から—」(自主)

「不登校やいじめの問題を学校ストレスという観点から考える」(自主)

「カウンセリングと生徒指導における書記的方法」(自主)

「障害児教育における学校心理学の適用—教育計画と支援システム—」(自主)

1997年:第39回総会,広島大学

「『学校心理士』への期待(スクールカウンセラーとしての学校心理士)」(公開)(認定委員会)

「いじめの機制と指導」(公開)(準備委員会)

「学校改善をめざした教育心理学研究の課題と展望」(準備委員会)

「児童・生徒の学校適応について考える」(自主)

1998年:第40回総会,北海道教育大学函館校

「学校心理士 今 21世紀へ」(談話会,準備委員会)

「聴覚障害児の思春期・青年期を考える」(自主)

1999年:第41回総会,兵庫教育大学・甲南女子大学

「学校心理士と教育現場」(認定委員会)

「『学級崩壊』を考える」(準備委員会)

「非行・いじめ・不登校・高校中退などの諸問題—援助のための教師の実践と自己研修のすすめ方—」(自主)

「学級崩壊を通して心の教育のあり方を考える—幼児教育と小学校教育の連携の視点から—」(自主)

「心の教育プログラムの開発と実践」(自主)

「学校におけるスキル教育を考える」(自主)

「聴覚障害児の思春期・青年期を考える」(自主)

「現実の教育の諸問題を実践的に解決できる教育心理学をめざして—学校心理士の研修の内容と方法を考える—」(自主)

「生徒指導についての教師の意識にみられる『世間体』の構造」(自主)

「不登校(登校拒否)の子どもとその親への教育的・心理的支援を考える—学校に行けない子どもとともに歩む父母の会『愛和会』の活動を中心に—」(自主)

「学校における『こころとからだの健康教育』の実践」(自主)

「子どもの自我・自己の成長と学校心理学」(自主)

「学級集団指導論の展開」(自主)

2000年:第42回総会,東京大学

「教育心理学から見た『学力低下』の問題」(準備委員会)

「学校におけるカウンセリング活動の現状と課題」(準備委員会)

「学校心理学と臨床心理学の交流」(準備委員会)

「現実の教育の諸問題を実践的に解決できる教育心理学をめざして(2)―教育現場から考える学校心理士の研修の内容と方法―」(自主)

「21世紀の相談活動―スクールコンサルテーションの実践と課題」(自主)

「『子どもの育ちの異変』に発達・教育の専門家は貢献できるか―帰るべき『正しい場所』の無い時代に生きる子育ての希望と創造―」(自主)

「現代の子どもたちに対する教師のあり方とは―学級崩壊、生徒指導に悩む教師をサポートする視点から」(自主)

「児童生徒の学習支援における学校心理士の役割と課題」(自主)

「子どもの問題行動の背景にあるもの」(自主)

「スクールカウンセラー実習の検討」(自主)

「教師発達と学級経営」(自主)

2001年：第42回総会，愛知教育大学

「ゆれる子どもの心とどうむきあうか」(公開)(準備委員会)

「通常学級における『落ち着きのない子どもたち』をどう支援するか」(準備委員会)

「学習障害児の課題と現状―効果的支援を求めて―」(準備委員会)

「いわゆる『学級崩壊』をどう克服するか」(準備委員会)

「知能検査の新しい活用」(研究委員会)

「子どものストレスにどう対処すればよいか」(研究委員会)

「教育心理学から学校・家庭・地域社会の連携を考える」(自主)

「学校心理学における学習・発達支援の方法と課題」(自主)

「大学と地域のコラボレーションに支えられた相談・教育活動の実践と課題」(自主)

「現実の教育の諸問題を実践的に解決できる教育心理学をめざして(3)―教育現場から考える学校心理士の果たす役割と専門性とは―」(自主)

「学級における教師―生徒関係をどう質的に記述するか」(自主)

「学校経営に活用するグループ・アプローチのあり方―学級崩壊の予防・対応から積極的活用へ―」(自主)

「中学校臨床を考える―問題行動に焦点をあてて―」(自主)

「『いわゆる学級崩壊』研究の糸口をもとめて」(自主)

「『社会志向性』と『社会的コンピテンス』を教育する」(自主)

「学校心理士は何を研究・研修すべきか―ブリーフ学校カウンセリング：解決焦点化アプローチの導入」(自主)

「学校現場で教育実践力を高めるABC―教師の資質・力量・指導力を考える―」(自主)

ここに取り出したシンポジウムは、いわゆる学校心理学を目指して企画されたもの以外のものも含まれるが、課題を取り上げた趣旨や問題解決の方向を推測すると「学校心理学」に関連するテーマとして議論されていることが見えるものである。このように、総会を開催する大学も、自主シンポジウムでの課題設定にも、学校教育における学校心理学的視点が重要な問題として認知されてきていることが明らかである。

3. 学校心理学の研究をどう考えるか

(1) 学校心理学における「研究」と「実践」

教育心理学会総会における研究発表の中に、学校心理学の「研究」と考えられる発表が数多く見られる。これらの研究は、個別の子どもを対象とした事例についての報告から、学級への介入や学校組織の改善への提言などさまざまなスタイルがある。そこで、学校心理学の研究とは何かをあらためて次のような観点で考えてみることにする。

第1の観点は、その研究が、学校心理学を支える学問的基盤となる心理学の研究領域のもので、かつ、学校教育に関連しているかどうかである。すなわち、教育心理学、教授・学習心理学、発達心理学、臨床心理学、人格心理学、社会心理学、障害児の教育と心理などの分野で、研究が学校教育に関する問題を指向しているかどうかである。

第2の観点は、学校心理学は単なる理論だけではなく、問題解決に向かう実践活動が強調される。したがって、研究の視点や目標、展開にどのような実践性が含まれているかである。実践性とは、個別の子どもを対象としたカウンセリングや心理療法という実際の活動だけでなく、例えば、学級における児童の問題行動の実態を調査して、その結果を学級指導の改善計画にどう組み込むかということも考えられる。

第3の観点は、学校教育に関連して起こる児童生徒の問題に関して、児童生徒及び教師、学校、保護者、家族などへの問題解決援助の視点があるかどうかである。このことは、学校心理士の役割としての心理教育援助サービス(援助活動)に対応する。すなわち、

一次的教育援助；すべての子どもが対象で、例えば、小学校入学時の適応の問題、学び方の問題(学習スキル)、社会的スキルの教育などが焦点となる。

二次的教育援助；一部の子どもの対象となり、例えば、登校しぶり、学習意欲の低下、注意散漫、劣等感

による消極的行動など、学校生活に何らかのつまづきが見える場合で、その子どもにとって望ましい学校生活の重大な妨げになることが認められる問題への援助活動である。

三次的教育援助：特定の子どもが対象となる援助活動である。不登校（登校拒否）、いじめ、学習困難（LD）など、学校心理学の専門的観点と方法によって問題解決がはからなければならないような援助活動である。

この観点は筆者の考え方であって、決定的なものではない。しかし、学校心理学は従来の既に学問領域として体系化されている心理学とは、研究の性質が異なることは明らかである。これから学校心理学がどのような方向に進んでいくかは、「研究」と「実践」との兼ね合いをどう考えるかによっていると思われる。

教育心理学研究第48巻から、実践研究の論文発表枠が設定されている。既に発表されている研究の中で、認知カウンセリングの事例を通して学習指導の方法を提案している市川の研究(2000)、学習障害児の計算スキルの教授における動機づけ介入の効果を検討している植木の研究(2000)、さらに、「学級の荒れ」(学級崩壊)を改善のために、TT(ティーム・ティーチング)の手法によるコンサルテーションを行った浦野の研究(2001)、小堀・上淵が行った「勉強に集中できない子」に対する情動のモニタリングによって学習行動を改善させた実践研究(2001)、藤枝・相川の学級集団を対象としてその学級を構成する児童たちの社会的スキル(他者や仲間との関わり方)を改善させる指導実践(2001)は、上に挙げた学校心理学研究の3つの観点到合致していると考えられる。教育実践を研究論文としてまとめることの意義がこの点にある。

(2) 教育心理学会総会の研究発表の特色

次に、上に述べた観点に基づいて、第43回総会で発表された研究発表を見ると、学校心理学に関する研究発表と考えられるものは約230件を数えることができる。さらに、扱われているテーマの内容や方法を前述の二次的教育援助と三次的教育援助に限定してみても、61件の発表が行われている。総会での発表は学校心理学の分野を特定していないので、全発表718件の中で、一次的教育援助のレベルで見ると32%、二次的、三次的教育援助のレベルで見ると8.4%が学校心理学に関連するものとみなせる。これが多いか少ないかは評価の分かれるところである。因みに、同様の視点で、1996年度(筑波大学、この年はまだ学校心理士資格認定を行っていない)では、591件の発表中31件(5.2%)、1999年度(兵庫教育大学・甲南女子大学、学校心理士資格認定が始まって3年目)では、650件中、67件

(10.3%)、2000年度(東京大学)では、737件中、50件(6.8%)であったことをみると、学校心理士の資格認定によって、教育心理学における学校心理学の位置づけが徐々にではあるが、高まりつつあるといえよう。

この61件の発表をさらに、分類すると、
「不登校(登校拒否)」、「いじめ」を扱った発表 19件
「スクールカウンセラー」や「心の教室相談員」などを扱った発表 7件
「コンサルテーション」の問題を扱った発表 4件
「適応指導教室」の問題を扱った発表 5件
「学校の教育相談」、「生徒指導」、「養護教諭」の問題を扱った発表 5件
「学習障害(LD)」、「知的障害」を扱った発表 17件
「学級崩壊」、「学級指導」を扱った発表 4件
であった。スクールカウンセラーや学級崩壊に関する「今」の学校教育における心理教育的問題に関心が寄せられていることが伺える。学会総会での発表を「学校教育に関連する」ということの理解の幅をもっと広げるならば、教育心理学研究と学校心理学の重なりがさらに大きくなっていることは疑いのないことである。

(3) 研究の概要

不登校・いじめを扱った研究

不登校、いじめに関する問題は、不登校の状態になっている児童生徒本人は言うまでもなく、その保護者や家族、教師や学校に心理的、社会的不安やストレスを喚起する。不登校状態にある子ども自身の心理的葛藤をどのようにして克服するか、それに対してどのような心理教育的援助が可能で、必要かを検討することは、不登校状態にある子どもへのカウンセリングなどによる直接的な援助や家族環境や学級雰囲気改善などの周りからの援助も重要なことがいわれている。

本総会では19件の研究発表が見られるが、不登校の児童生徒についての教師の認知や意識に関する調査研究、子ども自身の自己認知や自己の価値づけについての調査研究と不登校状態にある子どもへの支援の事例と母親への支援の事例が報告されている。

岩永：不登校担任経験が教師に与える影響—「教師のための不登校対応自己効力尺度」を用いて(調査)
古屋・中野・岡田・芳川・畑屋：不登校支援に関する意識調査(1)—小学校教員の悩みと課題—(調査)
芳川・畑屋・岡田・古屋・中野：不登校支援に関する意識調査(2)—中学校教員の悩みと課題—(調査)
網谷：3タイプの不登校児童生徒に対する教師の対応—教師の登校重視度との関連を中心に—(調査)

阿部：不登校生徒のセルフ・エスティームと自己認知の
関係（調査）

塚野・金木：不登校児における自己価値づけの検討(2) (調
査)

金木・塚野：不登校児における自己価値づけの検討(3) (調
査)

古市・辻：学校に行きたくないとき、学校を休む子と休
まない子（調査）

伊藤：保健室登校に関する養護教諭の意識（調査）

これらの調査資料による不登校児童生徒の心理的教育
的問題の理解は、教師や学校の適切な教育活動に寄与す
るところが多いので、様々な観点から活用されなければ
ならないと考えるが、学校心理学の実践的側面として実
際に不登校の状態にある児童生徒にどのように対応し、
どんな援助をしているか、その援助が望ましいものかを
検討することも重要である。実際の援助活動やサポート
の事例を発表することは、その事例を整理し、振り返る
だけではなく、その活動の有効性を多くの視点から評価
される点で重要なことである。

小野：中学生断続不登校の継続登校への支援—社会的ス
キル訓練を中心に—(事例)

真鍋・児島・山下：友人のいじめによって不登校になっ
た女子中学生（事例）

児島・西田・真鍋：学校をやめたいと訴える相談事例（事
例）

上原：キャンプ体験が不登校児童生徒の行動変容に及ぼ
す影響に関する研究—Field Encounter Counsel-
ingの実現に向けて—(事例)

山田：不登校の子どもを持つ母親の心理的变化の過程と
心理社会的援助体験（事例）

海野：登校拒否の改善解決支援の視点 その6
—家庭内暴力への対処—(事例)

宮野：不登校・家庭内暴力を乗り越えた若者—不登校・
家庭内暴力の意味と自分づくり—(事例)

いじめの問題については、

土本・中谷：いじめに対するサポートの有効性—教師及
び友人によるサポートの有効性認知に関する発達
的变化—(調査)

雨宮・小谷：いじめの心理的力動と介入方法の検討(事例)

スクールカウンセラー，心の教室相談員に関する研究

不登校問題や学習困難，学級指導における児童生徒と
教師問題などの解決のため，スクールカウンセラーの派
遣が進められ，さらに心の教室相談員としての援助活動
が行われている。このことに関して，これらを受け入れ

る側の協力体制の作り方や活動に対する希望や問題点な
どが指摘されている。

三浦・今野：スクールカウンセラー導入に関する一考察
(調査)

栗加・遠藤：スクールカウンセラーの受理相談の分析(5)
(調査)

遠藤・栗加：スクールカウンセラーの受理相談の分析(6)
(調査)

難波・中野：望まれるスクールカウンセラーの形態(調査)

大川：心の教室相談員の活動に対する期待と効果(調査)

中村：「心の教室」に関する学生相談員との協働について
—「心の教室」学生相談員の意識調査より—(調査)

山内：心の教室における相談員からの心理教育的援助
—教員や学校へのコンサルテーション活動を中心に
—(事例)

これらの研究を通じて指摘されていることは，スクー
ルカウンセラーの実践的な問題解決能力や学校に常駐し
て，専門的立場で問題に対応することなどの要望が強い
ことである。心の教室相談員についても，その役割を明
確にし，教師との連携を図ることや相談員の資質の向上
など補う点が多いことを指摘している。

コンサルテーションの問題を扱った研究

小林：学校外教育相談員によるコンサルテーション—発
達に偏りのある子どものいる担任への支援—(事例)

仲手川：小学校1年生の遊戯療法を中心に学校へのコン
サルテーションを行った過程（事例）

品田・河村：学級経営に悩む教師への危機介入の方法の
検討（事例）

高山：中学不登校ゼロになるまでの学校安談の歩み(事例)

田村・石隈：中学校教師の被援助志向性と自尊感情との
関連（調査）

適応指導教室を扱った研究

谷井・沢崎：適応指導教室の運営実態とその課題(1)(調査)

高元：適応指導教室の課題と展望（調査）

桐原・須々木・大庭：適応指導教室と学校との連携（調
査と事例）

濱谷・鈴木：適応指導教室における学生ボランティアの
役割と意義に関する研究（調査）

曾山・本間・谷口：不登校を背景要因に持つ性とに対す
る構成的グループエンカウンターの効果—適応指導
教室での事例を通して—(事例)

教育相談、生徒指導、養護教諭を扱った研究

- 佐藤：学校における教育相談の在り方に関する研究Ⅰ—体制調査の結果と考察—(調査)
- 寺田：学級カウンセリングにおける写真対話法の開発Ⅱ—デジカメ・アルバム作成の試み—(実践)
- 尾崎・浅川・天根・古川：中学校教師の生徒指導に関する研究Ⅰ—中学校長の勢力資源について—(調査)
- 前田・中川・浅川・古川：中学校教師の生徒指導に関する研究Ⅱ—生徒の不安要因と教師に対する相談希望内容の分析から—(調査)
- 宮本：養護教諭の複合的ヘルパーとしての援助活動における多様性—学校心理学の枠組みから—(調査)

障害児、障害児教育を扱った研究

このテーマの研究は、現在の学校教育において最も重視されている教育課題であり、スクールサイコロジーの重要な対象である。以下の研究発表にも見られるように、LD児の教育やADHDが見られる子どもの援助に関して重要や関心が寄せられていることがわかる。

- 中島：学習障害児の仮名書字能力について—LD群と健常小学生群の比較—(調査)
- 別府・宮本：小学校における指導上困難な児童についての調査研究(1)—学習困難、多動衝動的行動を持つ子どもの出現率を中心に—(調査)
- 宮本・別府：小学校における指導上困難な児童についての調査研究(2)—児童の特徴と教師の対応、効力感を中心に—(調査)
- 安藤：言語性LDが疑われたネグレクト児—心理検査バッテリーの解釈から—(事例)
- 吉田・後藤：LDが疑われる児童の就学前の発達プロフィール(1)—乳幼児検診後のフォローケースから—(事例)
- 後藤・吉田：LDが疑われる児童の就学前の発達プロフィール(2)—就学・修学支援に関連して—(事例)
- 小川・畦内：知的障害児との音楽を媒体とした相互作用(事例)
- 田中：知的障害児をもつ両親を支えたサポート源について—子どもが就学前の時期について—(事例)
- 本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島：ADHD傾向を持つ子どもの保育に関する研究(1)(調査)
- 兵藤：多動傾向児の認知能力と社会適応(事例)
- 芳賀・芳賀：親の注意散漫傾向が児童の学習行動の弛緩化に及ぼす影響(事例)
- 五十嵐・酒井・宮坂・溝部：ADHD(注意欠陥多動性障害)におけるワーキングメモリーの検討(事例)
- 水野：K—ABCに見られる高機能広汎性発達障害児の

特徴—学習障害児との比較から—(調査)

- 福井・横川：発達の遅れのある児童を持つ母親に対するポジティブフォーカスの効果(事例)
- 井澤：自閉症児における問題解決のための対人技能の指導(事例)
- 小林：通常学級における自閉症児の学校生活—事例を通して支援の在り方を探る—(事例)
- 松村：被虐待児童の学校場面における援助について—「落ち着かなさ」への対応を中心に—(事例)

学級崩壊の問題を扱った研究

- 長橋・今野：「学級崩壊」の現状に関する調査研究(その1)(調査)
- 浦野・松村：教師たちは、学級の雰囲気はどう変えようとしたか(1)—ある学級担任の場合—(事例)
- 松村・浦野：教師たちは、学級の雰囲気はどう変えようとしたか(2)—ある「学級の荒れ」への組織的対応の場合—(事例)
- 古田：崩壊学級の担任として(事例)

4. 今後の課題

教育心理学会の学会発表から、「学校心理学の研究」と考えられる研究を取り出したけれども、それが学校心理学の研究であるという絶対的な基準はまだ明らかではない。ここに取り出した研究発表の多くは、本学会の臨床部門と重なっているであろう。また、他の学会発表には、より多くの実践的研究や事例が発表されているはずである。

上野(2000)が指摘するように、学校心理学の研究は、単に研究の場が学校であるとか、研究の対象が児童生徒であるというのではなく、学校での心理教育的支援を心理専門家と学校教育現場にいる教師との協働の中で進められる実践的性格と施された心理教育的支援が児童生徒の発達や教師、学校の教育活動をどのように高めたかあるいは高めることができるかという実証的性格を持つていなければならない。

学校の教育活動は実践である。しかし、学校の教育活動に関する実践研究は、教育活動の実践の単なる記述(記録)ではなく、研究の視点が明確でなければならない。学校心理学の場合は、研究テーマとして取り上げる課題が、学校教育のどのような問題と関わっているか、その課題の問題点を明確にすることによって児童生徒が、教師が、学校があるいは保護者や家族がどのような望ましい方向に改善されるかの視点が明確であることが重要である。

例えば、不登校の問題はまさに学校教育上の重要な課題である。この課題を教育実践の中で取り上げることは、

不登校の実態を知るだけでなく、また、子どもの不登校の原因や理由を明らかにするだけにとどまらず、その不登校の改善に何が必要か、望ましい改善にどのように関わったかの示唆や提言が含まれていることが重要であろう。

本稿は、昨年の教育心理学会総会のシンポジウムと研究発表から、学校心理学の研究の動向を検討しただけであるが、他の関連学会においては、子どもの問題に関しての事例研究がより多く発表されていると思われる。今後、学校心理学が学校心理士としての活動を通して広がっていくことが予想されるが、学校心理学の有効な実践を進めるためにも、「学校心理学研究」を充実させることが重要な課題である。

引用文献

- 藤枝静暁・相川 充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, 49, 371-381.
- 学校心理学実行委員会 1993 学校心理学とは 日本教育心理学会
- 学校心理士資格認定委員会 1996 スクールサイコロジストとは—学校心理学に基づくスクールカウンセラー— 日本教育心理学会
- 学校心理士資格認定委員会 1998 学校心理士の資格とその活動について 日本教育心理学会
- 学校心理士資格認定委員会 2001 学校心理士の役割と活動について—学校心理士活用のすすめ— 日本教育心理学会
- 市川伸一 2000 概念, 図式, 手続きの言語的記述を促す学習指導—認知カウンセリングの事例を通しての提案と考察— 教育心理学研究, 48, 361-371.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
- 石隈利紀 1997 学校心理学に基づくスクールカウンセリング—一人ひとりの児童生徒を活かす学校教育をめざして— 教育心理学年報, 36, 40-44.
- 小堀友子・上淵 寿 情動のモニタリング操作が学習に及ぼす影響 教育心理学研究 49, 359-370.
- 松浦 宏 1998 学校心理学の進め方 高野清純・渡辺弥生(編) スクールカウンセラーと学校心理学 第2章, 教育出版
- 日本教育心理学会第37回発表論文集 1995 茨城大学
- 日本教育心理学会第38回発表論文集 1996 筑波大学
- 日本教育心理学会第39回発表論文集 1997 広島大学
- 日本教育心理学会第40回発表論文集 1998 北海道教育大学函館校
- 日本教育心理学会第41回発表論文集 1999 兵庫教育大学・甲南女子大学
- 日本教育心理学会第42回発表論文集 2000 東京大学
- 日本教育心理学会第43回発表論文集 2001 愛知教育大学
- 植木理恵 2000 学習障害児に対する動機づけ介入と計算スキルの教授—相互モデリングによる個別学習指導を通して— 教育心理学研究, 48, 491-500.
- 上野一彦 わが国における学校心理学の課題—学校心理士と特別支援教育をめぐる— 教育心理学年報, 40, 143-145.
- 浦野裕司 2001 学級の荒れへの支援の在り方に関する事例研究—TTによる指導体制とコンサルテーションによる教師と子どものこじれた関係の改善— 教育心理学研究, 49, 112-122.